

学生が留学を決定する要因についての一考察

岩 城 奈 巳

〈要 旨〉

長期・短期に関わらず派遣留学に関する研究は、留学に参加した後の効果、成果について調査されてきたものに集中しており、「どのような理由や目的をもって学生は留学を決意するのか」という根本的な部分、すなわち、留学を決定する要因に関しての研究は限られてきた (Li, Olson, and Frieze 2013, Anderson and Lawton 2015)。日本人学生のグローバル人材育成に向けた取り組みとして海外に目を向けさせる留学の推進を大学はおこなってきたが、提供しているプログラムが学生の希望や目的に必ずしも一致している、もしくは応えているものだとは限らない。国を挙げて後押ししている日本人学生の海外派遣人数のさらなる増加のためには、まずはプログラムを設計する大学が学生の留学を決心する要因をしっかりと把握し、それらを理解した上でニーズに合ったプログラムを立ち上げることが必要不可欠である。この調査では短期留学が決定した渡航前の学生 125 名を対象に、留学に求めていること、期待していること、留学を通して得たいことについて調査し、そこから見えてきた留学を決断した要因について紹介する。

1. はじめに

日本の国際競争力を高めグローバル社会で活躍する日本人の「グローバル人材育成」に向けた取り組みを国、大学が後押しして久しい。グローバル人材の要素とは、1) 語学力・コミュニケーション能力、2) 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、3) 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ (2011年6月、内閣官房グローバル人材育成推進会議) として定義されており、これら人材育成のため

2012年以降、文部科学省は「大学の世界展開力強化事業」、「グローバル人材育成推進事業」、「スーパーグローバル大学創成支援事業」などの競争的資金を採択大学に分配し、グローバル人材育成の一環として日本人大学生の留学促進、留学支援をしている。さらに2014年からは産業界も人材育成の支援に乗り出し、産学連携の海外留学奨学金プログラム「トビタテ！留学 JAPAN」に代表される留学支援制度も開始し、官民両面から日本人大学生への海外留学支援に乗り出したことで制度面と金銭面からも学生にとってさらに留学しやすい環境が整い始めている。以前は日本人が留学しないという声も聞かれたが、日本学生支援機構の「協定等に基づく日本大学生留学状況調査」の最新の結果によると、海外留学者数は105,301人で、前年度の96,853人より8,448人、5年前と比較すると39,928人増加している（2019年1月）。その中でも交換留学などの長期プログラムでは（この場合、6ヶ月から1年未満の交換留学などのプログラムを指す）参加者が9,656人と5年前と比べ2,146人増加、1ヶ月未満の留学は長期以上に派遣数を伸ばしており、14,982人増えて39,202人となっている。これは、政府主導の競争的資金により専任教員の配置や語学支援コースの設置、そして、個々の大学においても模索しながらそれぞれ独自の方法で海外留学を促進し、大学主導による交換留学や短期留学が活発化していることを表す。

総務省がまとめたグローバル人材育成の推進に関する政策評価書（2017）によると、企業が大学に求める留学期間は異文化理解力、海外赴任に耐え得る経験を積むためとして長期留学を理想としているため、増加した留学生数のうち86.0%が1ヶ月未満の短期留学であることは企業が期待する留学期間と実際の留学期間に齟齬が生じている。しかし、文部科学省による日本人の海外留学の効果測定に関する研究調査では短期留学に関して「自己評価による留学前後での能力の伸びは、短期や長期といった留学期間に関わらず伸びる」、「渡航期間について・・・（中略）中長期の留学でなく短期留学であっても意義はあるといえる」と結論付けているように、短期留学でも語学能力の向上や異文化理解や異文化適応の促進など一定の効果を得ることが可能であることは明らかになっている（「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」2018）。また、調査では「長期留学への参加を促すには短期海外プログラムの設計とその後の促進活動が重要である」とも示しているように、海外に目を向けさせる最初のステップとして短期留学を位置付け、そこで得た経験を海外インターンシップや交換留学など長期留学への関心を喚起する意味としても短期留学は活用できると考える。

2. 先行研究

長期及び短期留学の成果に関する研究報告は量的・質的ともに両方の側面から多く報告されている。長期留学に関しては、前田（2016）が Semester 留学から帰国した学生の調査を実施し、海外留学における学びとして自文化・他文化への理解が共通して伸び、さらに人間的成長に関連した項目での成長が見られたと報告している。また、中川（2013）は交換留学した学生に対してアイデンティティの変容を観察し、長期留学によって学生はポジティブな自己を獲得し、より確かな自我を確立することに成功したと分析している。短期留学の報告では、大津・佐竹（2016）が4週間の短期留学と語学力の向上について調査し、特にリスニングの力が伸びたこと、さらに成績下位のグループほど伸び方が大きくなる傾向が示唆されたと報告し、小林（2013）も4週間の研修についての帰国報告書の記述欄から語学能力、トラブル、困難への対応力など多くの領域で向上効果が認められたとしている。その他にも事前・事後アンケートを比較し、留学成果を検証したもの（近藤 2012、山川・平本・松岡・三宅 2015）、研修後の学生の異文化理解の向上について調査したもの（Coker 2018, McLaughlin, Johnson, and de la Rosa 2018）、留学後の語学能力と適応能力の伸び率（鈴木・林 2014）など、留学の効果が留学後の調査によって報告されている。一方で、留学前の調査として、どのような理由や目的を持って学生が留学を決心するのか、留学を通して得たいことなどの基本的な理由について、Anderson らが “published research on students motivation for taking part in study abroad program is surprisingly sparse”（Anderson and Lawton 2015: 54）と述べているように調査はほとんど実施されてきていないのが現状である。交換留学などの長期留学の場合、学生の所属する大学が協定を持つ海外の大学にて1学期間もしくは1学年間現地の学生とともに英語もしくは現地の言葉にて自身の専門を学習し、単位を取得してることが前提としてある。それぞれの協定校より要求されている語学スコアをクリアし（TOEFL-iBT 80、IELTS 6.0 など）、多くの場合は「なぜ留学するのか」具体的に書類や面接審査時に説明する必要があるため留学を決意する時点で留学の動機が明確で具体性があることが必要不可欠である。一方、短期留学は交換留学のような語学要件を課さないものが大半を占めており、長期留学の前段階と位置付けている大学も多く、希望すれば参加することが可能なプログラムが大半である。そのためプログラムも長期留学のよう

に「専門を学ぶ」ものではなく、「語学習得」、「異文化理解」など、どの専攻の学生でも参加可能であり、さらに海外初心者向けの内容で構成されている場合が多く、主催者側が海外研修で学生が期待することを想定して組まれてきた。Li、Olson、Frieze が “understanding students may assist educators in developing different types of programs and better promotional strategies to attract a wider variety of students to participate in study abroad programs” と述べ、必要なのは “to offer study abroad programs that match with students’ needs” (Li, Olson, and Frieze 2013: 80-1) と提案しているように、学生の留学の目的、留学に期待することや目的を整理し、そのニーズに答える短期留学を作っていくことでさらに派遣数増加に繋がると考える。グローバル化がさらに進み、小学校からの英語の必修化、アクティブラーニングの導入などからも見て取ることができるよう、世界で活躍できる人材育成のため日本人大学生への留学も今後政府によって後押しされることは明らかである。海外にまずは目を向けさせる方策として大学側も主催するプログラムを増加させ、結果、学生派遣数も継続して伸びていくことが想定される。本調査では特に短期留学に焦点をあて、渡航前の学生を対象に、短期留学に参加した目的、期待していることについてのアンケートを実施し、留学を決定した具体的な要因の調査を実施することで学生の留学へのニーズの掘り起こしを試みる。

3. 調査と分析

3.1 調査対象者・データ収集

本調査では短期留学が決定した学生 125 名を対象に、留学に期待すること、留学を通して得たいことなど、留学に行く決意をした理由についてアンケート調査を実施した。アンケート項目の選定にあたっては、過去5年間の短期留学に参加した学生の報告書を参考に、そこから読み取ることができた学生が現地にて「学んだこと・身につけたこと」を洗い出し、Anderson and Lawton (2015) が作成した留学に期待すること及び留学の動機についての事前調査票を照らし合わせて日本人学生に適した 33 項目を抽出した。回答方法は5件法 (5. とてもそう思う、4. ややそう思う、3. どちらとも言えない、2. あまり思わない、1. 全く思わない) を採用し、さらに短期留学に行く理由や留学にて得たいこと、その他コメントなど書けるよう自由記述欄を設けた。

今回の調査対象となった参加者はすべて学部生で、表1にある、8つの研修のいずれかに春学期もしくは秋学期に参加した学生（アンケート収集時点では留学が決定した学生）である。これら短期留学は全学教養科目として単位付与する大学主催のものを含め、参加学生は異文化適応・危機管理を含む事前オリエンテーションに参加必須であり、大学が窓口となって学生を海外に派遣しているプログラムである。

表1 短期留学概要

春学期開催	研修内容	期間
アメリカ	英語学習、現地の授業聴講、グループフィールドワーク、日系企業訪問	3週間
オーストラリア	英語学習、文化体験	4週間
カナダ	英語学習、文化体験	2週間
秋学期開催	研修内容	期間
アメリカ	英語学習、現地の講義聴講、ボランティア活動	4週間
スコットランド	英語学習、文化体験、個人フィールドワーク	3週間
ドイツ	ドイツ語入門、ドイツに関する講義履修、現地学生との交流	4週間
韓国	韓国語入門、日本文化発信の文化活動、現地学生との交流	2週間
フランス・ベルギー	フランス語入門、日本文化発信の文化活動、現地学生との交流	2週間

出所：筆者作成

3.2 統計分析結果

まず、質問33項目の中から平均値が高かった10項目を表2に示す。研修によって比重は異なるが、すべての研修において英語もしくは現地の言葉を学習する「語学学習」の機会が入っているにも関わらず、語学上達に関する項目は上位に入っていなかった。「異文化体験をしたい」、「現地の生活や文化に触れたい」、「視野や見聞を広めたい」など異文化に触れ、渡航先での経験を通し新しい世界が広がることに関する項目が並んでいる。それぞれの研修は、「授業聴講」「フィールドワーク」「ボランティア」など学びの目的も少しずつ異なっているが、学生が研修に対して最も期待していることは外国に出ることで触れることが可能となる「異文化経験」であることが統計結果から読み取ることが出来る。

表 2 記述統計

	平均値	SD
8. 異文化体験をしたい	4.77	.69
27. 現地の生活や文化に触れたい	4.73	.60
16. 視野や見聞を広めたい	4.71	.73
2. 世界を見る目を養いたい	4.66	.77
20. 自分の目で現地の様子を見てみたい	4.65	.77
14. 世界への理解を深めたい	4.63	.71
31. 大学生の今しかできない経験をしてみたい	4.60	.83
22. 人間として成長したい	4.58	.80
5. 様々な背景を持つ人々と交流してみたい	4.54	.79
26. 大学生ならではの体験をしてみたい	4.51	.82

出所：筆者作成

次に、留学に期待すること・留学を通して得たいことに関する 33 項目がどのような共通の特性から影響を受けているのかを明らかにするため、主因子法による因子分析をおこなった。固有値の変化は 12.58、2.78、1.80、1.46、1.38、…であり、因子の解釈可能性を考慮すると、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子構造を仮定して主因子法・Varimax 回転による因子分析をおこなった。回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 3 に示す。累積寄与率は 47.54 であり、各因子は以下のように解釈された。第 1 因子は 18 項目で構成されており、「視野や見聞を広めたい」「現地の生活や文化に触れたい」「自分の目で現地の様子を見てみたい」など、異文化への理解、さらに「世界を見る目を養いたい」「人間として成長したい」など自己成長のきっかけの内容の項目が高い負荷量をしめしていた。そこで「異文化理解と自己成長」因子と命名した。第 2 因子は 5 項目で構成されており、「語学力向上につなげたい」「自分の語学力を確かめたい」「語学学習のきっかけやモチベーションにつなげたい」などすべて語学に関する内容の項目が高い負荷量を示していたので「語学力向上」因子と命名した。第 3 因子は 9 項目で構成されており、「就職に役立つスキルを身につけたい」「就職活動の自己 PR にしたい」「就職やキャリア形成に役立てたい」といった就職に関連する項目と「実家を離れて暮らしてみたい」「将来の進路や方向性を探りたい」のような将来について考える項目が高い負荷量を示していたので「就職と自立」名付けた。

表 3 因子分析

項目内容	1	2	3
16. 視野や見聞を広めたい	.855		
27. 現地の生活や文化に触れたい	.841		
20. 自分の目で現地の様子を見てみたい	.783		
14. 世界への理解を深めたい	.765		
2. 世界を見る目を養いたい	.718		
31. 大学生の今しかできない経験をしてみたい	.693		
8. 異文化体験をしたい	.686		
22. 人間として成長したい	.682		
32. 現地の学生と交流がしたい	.654		
5. 様々な背景を持つ人々と交流してみたい	.600		
26. 大学生ならではの体験をしてみたい	.568		
9. 学生生活に役立てたい	.565		
23. 渡航先への興味関心（文化歴史、スポーツ、芸能など）	.563		
15. 自己理解に役立てたい	.559		
28. 海外への憧れ	.506		
13. 友達作りに役立てたい	.408		
11. 自分に自信をつけたい	.407		
6. 自分の力を試してみたい	.405		
7. 語学力向上につなげたい		.815	
3. 自分の語学力を確かめたい		.742	
18. 語学学習のきっかけやモチベーションに繋げたい		.681	
19. 学んだ語学を実際に使ってみたい		.502	
12. 外国語への抵抗感や苦手意識を克服したい		.394	
17. 就職に役立つスキルを身に付けたい			.665
29. 専門分野への理解を深めたい			.609
24. 就職活動の自己PRにしたい			.605
21. 就職やキャリア形成に役立てたい			.565
4. SNSでの交友関係を広げたい			.460
10. 実家を離れて暮らしてみたい			.454
33. 交換留学や学位留学につなげたい			.407
30. 将来の進路や方向性を探りたい			.370
25. 自立したい			.359
因子寄与	8.30	4.00	3.34
寄与率	25.7	12.1	10.1
			47.5

出所：筆者作成

因子分析の結果から見えてきたのは学生が留学に求めているものは大きく3つに分類できるという点である。「異文化理解と自己成長」、「語学力向上」、「就職と自立」と命名したように、学生は短期留学への参加を通して異文化に対する理解、異文化に身を投じることで実感できる己の成長、外国に身を置くことで習得が期待される語学力、さらには留学経験が将来の就職、そしてそれら経験は自立にも繋がると期待していることがわかる。

また、上記にて算出した「異文化理解と自己成長」得点、「語学向上」得点、「就職と自立」得点との総合相関を表4に示す。「異文化理解と自己成長」と「語学力向上」が ($r=.72$, $p=.001$)、「就職と自立」と「異文化理解と自己成長」が ($r=.51$, $p=.001$)、「就職と自立」と「語学力向上」が ($r=.49$, $p=.001$) とそれぞれが有意な正の相関を示した。3因子のクロンバック α 係数は「異文化理解と自己成長」が .86、「語学力向上」が .80、「就職と自立」が .93 と内的整合性があり、十分な値を得ることができた。

表4 相関関係と平均、SD、 α 係数

	異文化理解	語学向上	就職と自立	平均	SD	α
異文化理解	—	.712**	.508**	4.46	.58	.94
語学向上		—	.490**	4.29	.75	.85
就職と自立			—	3.42	.71	.80

注：** $p < .001$

出所：筆者作成

3.3 自由記述欄分析結果

自由記述欄の回答を分類した結果、因子分析と同じ「異文化理解と自己成長」、「語学向上」、「就職と自立」と分けることができるものが多かった。さらに、「大学生の間に留学したかった」「長期留学のため」と回答した学生も多くいた。以下が学生からのコメントである（原文ママ）。

「異文化理解と自己成長」

- ・ 様々な背景を持つ人との交流がしたい
- ・ 日本に留まっていたら知り得ない、思慮できないことについて、その存在に気づくため
- ・ 一步を踏み出したかったから
- ・ 視野を広めたいし、自分で自ら行動できるよう積極性を養いたい

「語学向上」

- ・ 英語力を向上させたい、海外の同世代とかかわりたいから
- ・ 語学力向上のため参加した

「就職と自立」

- ・ 行ける時に海外へ行き、様々なことを経験することで今後の学習の刺激や、異文化理解、自分自身の自立へとつなげたいと思い決意した
- ・ 将来の職業選択のための判断材料にしたいから
- ・ 今後仕事をする上で海外の人との交流は大切だと思ったのでこのプログラムに参加した
- ・ 地元の大学だから、自立した生活をしてみたかったから

「大学生の間に留学したい」

- ・ 留学するというのは、まとまった時間を取ることができる、大学生の特権だし、今しかできない経験をしたかったから
- ・ 大学生でしか留学はできないし、自分自身を成長させるチャンスだと思ったから
- ・ 留学はしたことが無かったので、学生時代にしかできないことを経験したいという強い気持ちがあり、研修参加を決意した

「長期留学のため」

- ・ 自身の、交換留学という長期的な目標達成のため
- ・ 語学力を向上させて長期留学につなげたいから
- ・ 1年生のうちに短期の海外研修を経験し、今後行くことを考えている長期留学の足がかりにしたいと考えたため

短期留学を経験した後、長期留学の希望について調査した研究は多くあり、松本（2014）は30名が参加した韓国への短期留学後「チャンスがあればまた留学したいと思うか」の質問に、はいと答えた28名に対し、どのような留学に興味があるか更に聞いたところ、15名は同じ短期留学、12名は交換留学と答えた。新居・岡田（2017）も同じく短期留学した274名に「今後長期留学をしたいか」聞いたところ、強くしたいと思うが56%、どちらかと言えば留学したいが27%と留学を希望する学生が全体の83%に上った。

さらに、岩城(2012)はオーストラリアに短期留学した学生を追跡調査し、参加した20名中7名が翌年の交換留学に応募、合格して翌年渡航したことを短期留学の成果として紹介している。このように、事後調査でモチベーションが上がった学生からの長期留学の可能性示唆、または実際に渡航した例は多く報告されているが、今回のように渡航前から学生に具体的な聞き取りをした調査の例は無い。この結果は短期留学を主催する大学が予め学生の参加する意図を汲み取りプログラムを組むことで学生がより効果を感じることができる留学を提供できる可能性を示唆している。

4. 考察と今後の課題

留学についての研究は、留学後の成果についてまとめたものが多くを占めており、なぜ留学に行くのかという調査はほとんど実施されていない現状の中、今回の調査によって学生は留学に何を期待し参加を決意するのかという基本的な部分を明らかにすることができた。因子分析によって「異文化理解と自己成長」、「語学力向上」、「就職と自立」と分類することができ、特に異文化を体験したいという点に重きを置いている学生が多数を占めていることが結果から判明した。国内の大学にて組まれている全学の学生を対象とした多くの短期留学で「語学留学」「異文化理解」の要素は取り入れているため、主催する大学の予想は間違っていないということも明らかにすることができた。

今回は125名のアンケートをまとめて分析したが、実施している研修はそれぞれ内容が異なるため個々の研修を調査することで学生が求める研修内容についてより理解が深まるとも考えられる。例えばアメリカの研修に参加する学生は研修内容に授業聴講も含まれることから将来は長期留学を見据えている学生が多く、反対に語学学習が中心の研修には海外に行くこと自体が初めてである学生が比較的多いといった違いがあるとも想定される。さらに、寮とホームステイ、プログラム構成も、各国の学生も参加するのか、日本人学生だけで構成されているのかなど、それぞれの研修でアンケートを実施するとより詳細に学生が留学を希望する理由が見えてくるだろう。また、今回のアンケートは「なぜ留学するのか」に焦点を当てその要因を探るよう設計して実施したため、留学後のアンケートは実施しなかった。次回は事前・事後アンケートを実施し、期待していたことにプログラムは応えることが出来たのかなど調査をすることでプログラム改善に

も役立ていきたい。

最後に、単に学生を留学先に派遣し、経験させるだけでは例え短期の留学でも学びはあまり伸びず、学生の満足度も高くないことを指摘したい。短期留学はその期間が短いことから確実な成果を得るため、教員が教育的介入をし、プログラムの質保障の担保に務めることが不可欠であるとも考える。多くの大学にて大学間協定などを持つ大学が主催する内容の保証された既存のプログラムに学生を派遣する、もしくは科目として事前事後研修を含めた大学オリジナルの研修を組むなどし、教育の質を維持しているのはその現れである。留学に参加する意義を理解し、強い意識をもって参加できるかで、学生が研修中に得ることができる内容に差があり、次に踏み出すきっかけも変わってくる。派遣先の国や大学に関する知識、研修にて必要となる知識など予め学習しておくことは必須である。また、渡航中も日記をつける、アクションログを義務化させるなどして日々を振り返る作業を課している大学が少なくないのは留学での成長を学生自身が可視化できる手段の一つだからである。グローバル人材育成に向け、今後更に開発が求められることが予想される短期留学に関して、今回得た結果を基に学生のニーズに合った研修を提供していきたい。

参考文献

- 岩城奈巳、2012、「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『留学生センター紀要』10: 23-30。
- 大津理香・佐竹正夫、2016、「短期海外語学研修はどれほどの効果があるのかー常盤大学の場合ー」『留学交流』65: 16-24。
(https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/__icsFiles/afieldfile/2016/08/05/201608otsusatake.pdf, 2019.9.10)
- 学校法人河合塾、2018、「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」平成29年度文部科学省委託事業。
- 小林康仁、2013、「短期海外研修による教育的効果の再検討」『一橋大学人文・自然研究』7: 162-85。
- 近藤益世、2012、「ニュージーランド研修事前・事後アンケート調査について」『語学教育研究所紀要』10: 31-41。
- 新居純子・岡田昭人、2017、「短期留学プログラムの評価と長期留学希望の関連性：東京外国語大学のショートビジットを事例として」『広島大学国際センター紀要』7: 37-45。
- 鈴木理恵・林千賀、2014、「海外語学短期留学の効果：学生の言語的・情意的

- 側面に見られる変化」関東甲信越英語教育学会『関東甲信越英語教育学会誌』28: 83-96。
- 総務省、2017、「グローバル人材育成の推進に関する政策評価書（要旨）」。
(http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/107317_00009.html, 2019.10.1)
- 独立行政法人日本学生支援機構、2019、「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」。
(https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl_student_s/index.html, 2019.9.9)
- 中川典子、2013、「日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ」『人間・社会・自然編』25: 53-75。
- 前田ひとみ、2016、「個別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」『目白大学高等教育研究』23: 1-10。
- 松本久美子、2014、「学生は短期語学研修参加によって何を得ているか」『長崎大学留学生センター紀要』21: 47-62。
- 文部科学省、2011、「グローバル人材育成推進会議中間まとめの概要」。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryu/_icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212_02_1.pdf, 2019.10.10)
- 山川健一・平本哲嗣・松岡博信・三宅英文、2015、「留学の事前指導と事後指導の一環としての英語による大学の授業」『安田女子大学紀要』44: 181-90。
- Anderson, P. and Lawton, L., 2015, “The MSA: An Instrument for Measuring Motivation to Study Abroad”, *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 26: 53-67.
- Coker, J., Heiser, E., and Taylor, L., 2018, “Student Outcomes Associated with Short-term Semester Study Abroad Programs”, *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 30: 92-105.
- Li, M., Olson, J. and Frieze, I., 2013, “Students’ Study Abroad Plans: The Influence of Motivational and Personality Factors”, *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 23: 73-89.
- McLaughlin, J., Patel, M., Johnson, D., and de la Rosa, C., 2018, “The Impact of a Short-term Study Abroad Program that Offers a Course-Based Undergraduate Research Experience and Conservation Activities”, *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 30: 100-18.